

Title	ドウ・モルガンの「東方の史前」：第三篇「西亞篇」の概要
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.2 (1929. 8) ,p.129(295)- 137(303)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290800-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドウ・モルガンの「東方の史前」

第三篇 「西亞篇」の概要

Jaque de Morgan の大著述 *La préhistoire*

orientale は、その逝去後、ルイ・ジエルマン (Louis Germain) 氏の校訂出版せしもの、全部三卷よりなり、第一篇は、總論、第二篇はアフリカ、第三篇は西亞細亞を取扱つてをる。エジプトにカウカサスに印度洋にペルシヤに、その一生を東方史前學の研究に捧げたドウ・モルガンの辛苦の結晶は此一書の中に盛り盡されてをる。殊にその第三篇は、彼が一八九七年より一九〇八年までペルシヤにおいてフランス文部・美術省の派遣團の團長として發掘に従事し、ナラム・シンの碑、ハムラビの法典、ニパラス女王の像、エラムの彩色土器、並びにその文字等の大發見となした時の偉大な勞作の成果、並びに一八八六年より一八八八年まで

カウカサスに滞在して得たその貴重な材料を綜合按配し、西亞文明の始原について明快にして確實な示唆を與へてゐる。新石器時代の後期に於て西亞文明の極東移入が喧しく論ぜられをる今日、本篇の概要を紹介し、此偉大な科學者の功績をしのぶのも徒爾ではあるまい。

第一章 シリア及びメソポタミアの舊

石器

鮮新世プリオセーンの終りにリバンとアンチ・リバンの山脈の褶曲が起り、イランの高地が崛起し、そのかはりヨルダンの谷が陥落し、メソポタミアの大盆地が生じたのである。アラビアの紅海に近きあたりに

雪をいたゞく大山脈が存在し、その北部にはメソポタミアにまでひろがる豊沃な大平原が存した。鮮新世後期と洪積世前期の豪雨にかたて加へて周圍山脈の雪解が、此平原を洪水で洗つて、荒廢させ、住民を根絶しとなし、砂礫の厚い層でおほふてしまつた。この烈日に燃えた、水なき河多き大砂漠の中に、著者は、千九百年に、デイル・エル・ゾルとダマスとの間、スークナで舊石器時代の遺物を發見した。ザアンサン氏によれば鮮新世と洪積世の時代にパレスチナの土地は五度ばかりの變遷を蒙つた。その叙述は、大體アラビア、メソポタミア盆地縁邊の山脈のいづれにもあてはめうる。即ち第一、大雨期、第二、乾燥期、第三、雨再來、氣候及び地貌の變動期、第四、靜穩期、第五、雨及び永河期である。スカンヂナビアの氷河の各時期と西亞のそれと一々符合せしめやうとするのは無理であるが、アラビアの砂漠に於ても北フランスに於ける如く舊石器時代の人間が、恐らく同じ時代の大洪水で、殲滅され、或ひは又追はれてしまつたことは確かである。恐らく西方で

全部人間が死絶えてしまはなかつたやうに西亞でもフェニキア邊にこの大災害に生き残つた人間があつたかも知れぬ。此處には舊石器時代の住民の居住した洞穴又は石器製作所が數多存する。然しその調査は未だ疑ふべからざる確實な證據を上述の推定に對し呈供しない。この種の遺跡の中著名なのは、サイダとスールの中間に位するアドルンの遺跡(アシウレアン型の石斧や、ムステイェリアン型の皮剝を出だす)、その北部、アイン・エル・カタラとアクビイシュエ河の間に位する遺跡(アシウレアン型の石斧、ムステイェリアン式構造の三角型尖頭、縁邊に多少手を加へた皮剝及び剝片を出だす)、ベイルートの北なるラス・エル・ケルブの遺跡(アシウレオ・ムステイェリアン期遺物を亂雑な状態の本に出土す)、ベイルートよりヂエバイルに至る道、ナール・イブラヒムの遺跡(シエレアン式消滅し、ムステイェリアン型のみ存續す)、バトルーンの北、ナール・エル・ヂオズの遺跡(石斧なく尖頭、皮剝、錐のみを出だし、ムステイェリアン形多く、恐らくは後期舊石器時代遺物)、ア

ンテリアスの洞穴（後期舊石器時代及び新石器時代遺跡）、ミネト・ダリッチの遺跡（ソリュエトリアン期といはれしも實は新石器時代遺跡）等である。此等の遺跡よりの發見物は、未だ充分年代的に分類されず、シリアにアシウレオ・ムステイェリアン型器具を使用した人類の舊石器時代に住みしことは確かであるが、上述の如くフェニキアの沿岸で大洪水以後生きながらへ得たかどうか不明である。要するにシリア・パレスチナの石器時代史はなほ將來開拓をまつ廣大な處女林である（註一）。

シリアの新石器

フェニキアの新石器に關しては、確かにその新石器時代のものであるか、或ひはまた金屬併用時代のものであるかを斷言することが出來ぬ、或形式或製法は、明かにエジプト王朝前の手法であつて、極めて太古からナイル河とシリアの間に交通の存せしことは了解出来る。當地の史前の住民が既にスーズ人、スメル人、史前のエジプト住民、エーゲ人等の如く、銅の製法を知つてをり、たゞ

その社會狀態極めて幼稚であり、金屬が原料として使用されず、或ひはまたごく稀れに使はれたに過ぎなかつたのであるのかも知れぬ。石斧は、燧石よりなり、全部磨かれず、此點エジプトにおけると同様である。スーズとエジプトに見當らぬ長い鑿が、發見される。皮剝ぎは、普通形式であり鋸には鎌形と、通常形の二種がある。それからごく原始的な幾何學紋様のついた粗末な土器の破片が發見される。パレスチナの遺物もシリアと同様である、所により、變化があるが、層位的研究が行き届かぬので、それが時代の先後を示すか、製作者の未開程度を示すか明瞭でない。

第二章 西亞に於ける黒曜石—露領ア

ルメニアの鑛脈

イランとトランス・カウカジイには石器時代の遺跡がない。それは洪積世の大部分を通じて氷と雪に掩はれ、住民がゐなかつたからである。氷がなくなつてからもペルシヤ高原とトランス・カウ

カズは永く人が住まなかつたが、たゞ小カウカズ山脈の南斜面、アラグウズ山より噴出したる黒曜石の鑛脈附近に著者は、一九〇九年後期アイケオリチツク舊石器形と新石器式の器具を發見した。一體アルメニア地方は特に良質の黒曜石を産し、スーズ、カルデア等の地方にまでごく古代に輸出されてゐた。アラグーズの山の北部に鑛脈と接する遺跡の中、著名なのはブウグウテヒダギの遺跡である。此處には後世の加工なき古色ある黒曜石器と、製作後ごく後代に再び加工した古色ある破片と、古色なき器具及び破片、並びに硅質片岩よりなつた器具が發見される。原料の豊富に比して加工品はあまり多くない。其他ハヂ・バゲル、チャム・ムウリ、キプチャク等の遺跡があるが、要するに遺物は舊新の二期に分れ、前者は古色ある器具を包含し、後者は、金石併用時代のもの、古色なき器具及び古きもので後代に手を入れたものを包含してゐる。洪積期の遺物は、ムステイエリアン、オウリナシアン、マグダレニアンの諸形を同時に含んでゐる。然しシエレアン又はアシウレアン型の器具を

出ださぬ。洪積期初期の遺物が、エジプト、パレスチナ、シイロ・アラビアの砂漠に多くあつて、北にないのは、此時代北方は氷が掩ふてゐたためであらう。氣候が改善されてから人類はまづ一番手近の所に侵入し、黒曜石の鑛脈を發見して、これを少しく採掘したのであらう。その人數はあまり多くなかつたといふことは原料の豊富、優良にもかゝはらず、遺跡の貧弱さから察することが出来る。此地方の研究が今一層完全に行はれたならば、果して洪積期の終りに人類が此處に住し、彼等が、氷が解けて大洪水の起つた時、メソポタミアの平原からこの山中に逃れしものであり、後にカルデア、エラムを殖民せしものであるかないかを知ることが出来やう。然し現在においては黒海の南沿山地、南アルメニア及びシンジャルの谷が未だ調査されてゐないので此問題を解決することは出来ぬ。恐らく將來、此等の地方にこそ、舊石器時代より後の所産で、かの南方平原に移住した金屬、織物、陶器を使用し、極めて進歩せる文明を既に有せる人民の文化に先立つ諸文化相を發見

し得るだらう。

第三章 カルデア及びスーズ平原の形成

イラン 臺地、リバン、アラビアの山脈、アルメニア、アナトリアの山地の崛起した第三紀の終りこれらの山地の間に大陷落地帯が生じた。これが當時延長してカルデア及びスーズを、掩ふてゐたペルシャ灣に相當する。盆地縁邊の山地の雪解けは、殊に北部に大洪水を起し、砂礫を運搬してこの盆地の北部を埋めてしまつた。それから後も多くの諸川が、年々の洪水に積石を前に押し流し、海岸線は、スーズでもメソポタミアに於てもだん／＼海の中に伸びてゐつた。河川の侵蝕力の衰へると共に積石のかはり、砂ついで泥土を運搬し始め、かくてカルデア平原が形成され始めた。チグリス、ユーフラートの二川がケルカ河と共にこの仕事を共力してなすとげた。スーズにおいてはアベデイヅ、カルトンの二川が北にジエラヒ河が東に沖積作用を營んだが、その仕事はチグリス、ユー

ドウ・ゴルガンの東方の史前（松本）

フラートの二川に及ぶべくもない。此二大河の沖積作用は、ナイルのそれより遙かに優つてをる。後者にあつては海流が、坭を押し散らしてしまつたが、前者には海流の來りて防ぐるものなく、泥と砂は相共に沈積して寄洲を形成し、其作用今日と雖も緩む所ない。紀元前六九六年にはユーフラートもチグリスもケルカもカルトンも皆獨立した河口を持つてゐたのであることを想起すれば、その沖積作用の如何に偉大なりしかを知ることが出来る。チグリス、ユーフラート二河が一つになつたのは恐らく紀元前後一世紀頃である。諸河はその河口に瀉をつくり、その瀉がついで沼に變じ、それが蘆荻におほはれ、島を生じ、最後にカルデアの國土をつくつたのである。さういふ沼は今日もなほ諸所に残つてをる。

エラムにおいても之と同様な現象が起つた。たゞ此處に於ては、高山迫り、諸河の押し流した積石は山下に堆積し、海が之を洗つて斷岸をつくり諸川は水力依然強く古き沖積物をなほ遙かに押し流して、海を埋めた。ケルカ河は山峽を出ると、

(二九)

一三三

その烈しき水勢をなほ持して、スーヰズまで厚い積石の洲を兩岸に残した。それから泥によつて沖積土を作り始めたのである。

第四章 カルデア及びエラムの殖民

カルデア　かく成立しつゝあつた平原にスメル人及びエラム人の祖先となる諸部族が、來つて定住したのである。全ての原始人民と同様原スメル人は、疑ひもなく血族團體からなつた部族に分れてをり、河川、沼澤、湖水、潟等によつて寸分され、嶋嶼、半島、突堤、堤防の状ある國土の上に無数の分離した小聚落を形成し、それが後に小國家となつたのである。後にアツカド人がカルデアに侵入し、この無数の都市を克服した時、土地の性質上、その住民の文化上、封建制度が誕生せざるを得なかつた。

スーヰアン　スーヰズの平原に於ける殖民も同じ工合であつた。スーヰズはケルカの河床に沿ふ粘土と積石の低丘の上にそびへてをり、アブ・エ・デ

ズとカルトンの兩河によつてつくられた三角地にも多くの遺跡がのこつてをる。たんに平原のみならず、イラン臺地の南及び西斜面の肥沃な谷も新來者によつて占領された。その全てが始原時代からではないがスーヰズ、テペ・ムウシアン、テペ・アリアバド、テペ・グウラムは確かに初期殖民時代の遺跡である。ペルシア高原の上にあつてはごく古代の舊跡はみあたらぬ。恐らく雪が解けてから後、ひろく湖水がひろがり、それが消滅して、オアシスと不毛の砂漠の交錯地を形成し、人類の恆久的生活が保證されなかつたのだらう。

スーヰズの第一都市　初期殖民者の残した遺跡

の中スーヰズは最も正規の方式に従つて發掘された。ケルカの左岸、粘土及び砂質の低丘の上に最初のスーヰズの都市は建設されてゐたのである。著者は一九〇七年より一九〇八年に至る發掘に於て多くの墳墓と土壁と、更にその土壁の内部に土器の破片、燧石器、壁の殘存、また黄土の層の中に灰と炭と焼いた骨の床を發見した。この土壁内の最深層からは多數の彩色土器の外にはごく小許の

品、しかも充分細心の批判を要するものが出たばかりである。その中でも疑ひなく古代のものは白石灰石で四周に四つの突起ある槌、同じく石灰石の細長い槌、土焼きの粗末な人形でナナの女神とおもはれるもの、黒斑らのついた鳥の像若干等である。墳墓は、地表にじかにしつらへたもので遺骨は一つとして完全にのこつてゐない。頭のちかくに壺、器具、武器、裝飾品など全ての埋葬備品が存する。遺骸は、覆ひか又は衣服をつけて埋葬されたらしい。といふのは、極めて精巧な亞麻より出来た多少繊細な布地のはつきりした痕跡が、銅器の上に残つてゐるからである。これらの織物は、吾人の知れる最古のものであり、五、六千年前に既に近世の機械も凌駕し得ない程精巧な亞麻製絲場の存在を證してをる。葬地において發見されし土器は、極めて原始的の製法である。輓轆臺は既に知られてゐたらしいが、壺は、概して手造りで粗鬆、埋葬用に特別に製造されしものらしい。色は單色で乾いて滑かになつた土の生地の上じかに施された。厚さ、焼きの度合で、色は濃い褐

ドウ・ポルガンの東方の史前（松本）

色から赤茶色に至る様々な色合を呈してをる。この手法は第一都市の消滅と共になくなつてしまつた。壺の上に表された模様は、極めて様式化し、之を畫いた人間は、もつと古代の模様を久しく模倣してゐたことを示してゐる。木や葉や花の模様は少いが、涉禽類や鷺に似た鳥や、巨大な角をもつ山羊、犬、龜等の動物模様が多く用ひられ、稀れに人間も出てくる。幾何學的裝飾もあるが、その大部分は、もとは何物かをあらはしたものが極端に様式化され、起源不明になつたものである。人像の中、兩槍の上に手を支へたのがあるがこの兩槍はマルデウクの神のシムボルらしい。銅の鏡を包含する、即ち婦人の墳墓の中に小喇叭ホルネット狀の灰色の石製壺が發見された。ごく原始的な輓轆でつくられたらしく、その中の或物は、分解された美顏料の残りを含んでをる。塚の中の裝飾品は、僅かで白い圓筒狀小玉からなり、所々黒又は灰色の同型の玉のはいつた頸輪、環形にいろどられた、彩色も土も土器と同質の小圓筒、穴のあいた貝、螺鈿及び石で出来た極めて單純な護符、刻まれ、穿

(三〇二) 一三五

孔のある壺の破片などが、男女兩方の墳墓に發見される。白石灰石で出來た圓い印の表面に鹿らしい四足獸と小圓孔のある印章も發見された。金屬器は、ごく少く、あまり變化なく、皆銅で出來てをる。多くは斧で、石斧の形式を眞似、たゞそれより薄く、形長く、中央稍ふくらみを帶び、側面方形をなし、刃の所が曲つてひろがつてをる。それから篋狀の、刃がひろまつて他端の細くつぼまつた斧、稀に鑿、錐、針を、また墳墓からは鏡を發見する。石製品としては不平行四邊形の黒石斧、中央ふくらみ、刃の平らなるもの、多數の石槌の斷片に穿孔あり裝飾玉として使用されしもの、篋の形をせる平らな滑かな自然礫石等を發見した。

スーズの燧石器

カルデア及びイランと同様

此處では新石器の遺跡が存しない。スーズより出でし燧石器は、金石併用時代のものである。原石ニウクレウスは三分の二ばかり切りとられて棄てられてをる。こうしてとつた剝片フラムをなほ必要ならばその側面にきざみをいれて錐、皮剝ぎ、小刀などをつくつたのである。黒曜石の器具は、多數であるが、燧石

に比すれば少い。後者の中もつとも多いのは鋸であり、瀝青で木の溝の中に定着され、鎌として使用された。これと共に石の磨臼の多く發見されることはスーズ最初の住民の農業を知つてゐたことを語る。石鏃もまたごく多く種々の形狀を呈してをる。磨製石斧の小なるものはヨロッパのと似てをるが大なるは、厚味なくその側面が曲つてゐる特色がある。殊に珍しいのは兩刃の石斧である。槌形石斧は少いが、戰槌は多くかつ種々な形狀に富んでをる。スーズ以外に見るを得ざる特色ある石器は篋狀石斧である(註二)。

スージアンの原始文明

之等の遺物から窺ふ

にスーズの最初の殖民者は、なほ石器を使用してゐたが、既に銅を知り、石器を眞似て金屬器具を製作してゐた。また好妙に亞麻を紡ぎ、織つた。女は裝身具や、粉黛を施してをり、農業が行はれ弓と槍が知られ、轆轤も存在し、巧みな土器製作者がをつた。彼等が宗教信仰を有してゐたことは豊饒の女神ナ、の小像やアスタルテの鳥の像や、マルデウク神のシムボルらしい槍の模様が土器に

見えることから知られ、來世信仰もその埋葬儀禮

みしか知らぬ住民は全然居住してゐなかつた。(未完)

によつて證據だてられる。ことに驚くべきは壺の
裝飾によつてあらはされた藝術的才能、趣味であ
る。スーズの土器は今日知られし最も古いもので
あるが、之にあらはれたいちじるしい様式化は、
大部分もとのモデルの何たるかを忘れしめてを
る。相つゞ模倣による此モチーフの變化はスーズ
の土地以外に非常に長い勞作、緩漫な進歩の成就
されしことを意味してをる。その動物の性質上か
らいへば皆アジアの山岳地に固有のものであり、
原エラム人の高原地より來りしことを證據だて
る。然しそれが何處であるかは今日なほ不明であ
る(註三)。

(註一) 最近の發見については、小牧實繁氏「パレスチナの
舊石器時代遺跡」(民族第一卷第五號掲載) 參照。

(註二) 此種の有柄石斧は、印度支那地方の之と別種な有柄
石斧と比較されてなる。cf. E. F. i att, Notes sur le préhis-
torique indo-chinois, p. 28.

(註三) 之等の住民が殖民する以前にはエラムにもカルデア
にもまたイランの山地にもペルシヤ臺地の西部にも石器の

ドウ・ホルガンの東方の史前(松本)

松本信廣